

スポーツ健康学部 沖村多賀典助教の「スポーツ精神の喪失 ～スポーツは社会の万能薬か?～」掲載

●中部経済新聞 2018年1月31日(水)

Opinion オピニオン

オープン
カレッジ

現代は日本人が歴史上最もスポーツに接している時代である。この時代にあつて、スポーツをさまざまな社会問題を解決する万能薬とみる動きも強まっている。第一に期待されているのは、スポーツを通じた「日本経済の活性化」である。特に東京五輪は、デフレ脱却に向けた一大国家プロジェクトと化した。また、「国際関係の改善」「国民の健康増進」「地域の活性化」などに対しても、スポーツの効き目は大きいと期

スポーツ精神の喪失

業化、スポーツを通じた国際的地位の向上、健康寿命の延伸、地域共生社会の実現がうたわれている。「成長産業」「医療費抑制」という根拠でスポーツ政策を正当化することが、ここ数年の大きな特徴である。また2015年には、その推進組織たるスポーツ庁が設置された。予算も拡大し、18年度のスポーツ庁予算は過去最高の340億円となる見込みだ。

しかし、こうしたスポーツの手段的活用は、失敗する危険性も孕んでいる。例えば東京五輪をめぐる例は、費用負担や一過性の問題に加えて、経済効果への疑義も提出されている。国際行われているのは、ひとむきな全努力の傾注である、という事実である。この努力に支えられたスポーツ「の」価値の実現がなければ、スポーツを「通じた」何らかの価値の実現は望むべくもないのだ。

では、スポーツの純粋な価値とは何だろうか。小林秀雄は、「われわれ凡夫でも、スポーツでは、がんこな正義派にならなければ、ちつともおもしろくない、というところに、スポーツのおもしろさがある」と述べた。「スポーツには、容易に外部から侵されにくい健全な強固な心棒がある」、小林はそれを「人間らしい道義」と表現した。同様にホイジンガは、真の文化に必須である「遊び」の要素がスポーツから失われつつあることを警告し、「真の遊びはいつさいのプロパガンダを斥ける。その目的は自らのうちにある」と述べた。

スポーツは 社会の万能薬か?

待されている。

政・官・民はこれらの効き目に着目し、それぞれの目的に沿ってスポーツを活用する。その中でも中央政府は、上記課題の達成に向けたスポーツ政策を近年積極的に展開している。そこではスポーツ産業の基幹産



名古屋大学 体育健康学部 助教授 沖村 多賀典

おきむら・たかのり スポーツ政策論。筑波大学大学院人間総合科学研究科単位取得退学。修士(体育科学)。1984年生まれ。

際関係では、スポーツの非政治的イメージを逆手に取ったスポーツの政治的濫用がみられる。健康のためのスポーツも、その根本たる国民スポーツ実施率の伸び悩みや二極化に直面している。地域コミュニティの核という触れ込みで全国に設置された総合型地域スポーツクラブも、定着したとは言いがたい。

このようにスポーツが無効または逆効果となる根源には、共通した見落としがあると思われる。それは、どれだけ大きな期待をかけられ、大きな影響力を持つとも、スポーツの現場で

あるためには、万能薬としての期待を捨て、スポーツの精神を育むしかない。東京五輪が経済問題としての論じられ、こうした話にほとんど至らないことが、大変気がかりである。